

伝統技術に学ぼう 活動報告

チーム D は、2014 年 11 月初旬の連休に伝統技術の見学会を実施しました。

<日程>2014 年 11 月 2 日、3 日

<場所>奈良、生駒周辺

<参加者> 13 名 (宿泊 9 名)

<スケジュール>

11/2 JR 奈良駅に集合

奈良筆田中 筆づくりの最後の工程を体験

奈良墨錦光園 握り墨体験

生駒 アイ・アイ・ランド (宿泊施設) へ移動

夕食後 会議室を借りて、座談会

→ 伝統技術に関して話題提供、それをもとに議論

コテージに移動して、座談会第二部

11/3

翠華園 茶筌作りを体験 お茶をいただく

<内容>

今回の奈良筆、奈良墨の見学先では後継者がいないとのことだったが、茶筌は何とか伝統を維持していくため、より積極的な活動をされているようであった。奈良筆の田中さんはそもそも数十年前に後継者育成プログラムで筆作りの道に進まれている。再び後を継がれる方が現れることを祈りたい。

後継者不足もさることながら、材料不足も深刻らしい。奈良筆では、使用する動物の毛は年によって出来不出来があつて、良い毛が出た年には買いだめするらしいが最近は取れにくくなっている。茶筌も良い竹がまとまって取れにくくなっているとのこと。

海外製もの、大量生産ものとの棲み分けも課題。

一方で、実際に“体験”することで、短い時間ではあるが伝統を身近に感じることができたのは貴重な経験となった。知らないことが多いことに驚いた。

筆は、複数の動物の毛を混ぜる、内側と外側で毛の種類を変えるなどで、毛筆に求められる筆先のしなやかさを実現している。我々が体験したのは最後に筆先をノリで固める作業だったが、簡単そうでコツのいる作業だった。





墨は膠に煤を練り込んだものだが、膠のにおいを消すために加える香料が各社独自の特徴となる。国産の墨は9割以上が奈良で、少しだけ鈴鹿で作られているが年々減少している。煤を取るための油の種類や煤を溜める覆いの高さの調節で、煤のきめの細かさを調整。煤を練り込んだ膠を木型で成型。木型の職人さん

も減ってきている。ここで我々が体験したのは握り墨。練りたての何とも言えない感触の墨を手のひらで握って手形を付ける世界に唯一の墨を作った。茶筌は、お茶会で主賓をもてなす際には新品をおろすのが礼儀とのこと。つまり消耗品であることもあり、安価な中国産にも押されている。最近では樹脂成形品で長持ちする茶筌（普段使い？）が新たなライバルとして浮上ってきている。茶筌は茶道の流派によって先端がストレートだったり、カールしていたり、竹の種類が異なっていたりで、その種類は80種を超える。覚えるのも大変。最後に、お茶を点てていただいた。慣れない作法で、何となくぎこちなかったのは私だけでしょうか？

座談会では、幹事側で準備した資料をもとに伝統技術との関わり方に関して議論した。少し発散してしまったため、まずは方向性をイメージとして描く宿題をいただきました。

